



伊勢物語は、平安時代の初頭に成立した歌物語で作者は不詳。多くは在原業平の歌に数行から数十行の短い話を付けたもので、全 125 段の物語には、歴史に取材した話や実在の人物も登場するが、ほとんどが業平を思わせる男が主人公の寓話のような男女の恋物語で、恐らくは源氏物語の作者に影響を与えた話の数々は千年以上も前のことだが、そこには我々と同じような切なく哀しい男女が描かれている。

今回のポコアは伊勢ということで、物語の中から幾つかの話しを拾ってみた。

春の長雨 都がこの平安京に移ったころ、まだ人家がまばらな西の京に一人の女がいた。女は美しく優しかった。その女に一人の男が通った。男と女は一夜をともに語り合った。時は春の初め、春雨の降る頃である。

起きもせず 寝もせで夜を明かしては 春のもととて眺め暮しつ

昨夜のことは夢か現実か、男は次の日の朝、春の長雨を眺めながら女にこんな歌を送った。話はこれだけだが、これが恋というものでしょうか。

井筒 昔、仲の良い幼馴染の男の子と女の子が居た。二人は親たちの勤めで田舎に住んでいたが、家の傍に「筒井」といって筒状に掘った井戸があった。

「僕がこの井戸より大きくなったら、君をお嫁さんにしよう」と、男の子が言った。

「私はそれまで、髪を切らないで待っているわ」と、女の子が言った。

何年かして、適齢期になった女には幾つもの縁談があったが、女は男との約束を守って断り続けた。しかし女は次第に不安になってきた。子供の時の約束を男が覚えているかわからないからである。そんな折、男から一つの歌が届けられた。

筒井つの 井筒にかけし まろがたけ 過ぎにけらしな 妹見ざるまに

君に逢わない間に僕の背は井戸を越えてしまった。女はすぐに歌を返した。

くらべこし 振分髪も肩すぎぬ 君ならずして 誰かあぐべき

私の髪も肩をすぎました。あなたの為に。こうして、二人は結婚した。

何年かして、男は河内の高安に新しい女が出来た。男が河内へ通うときは、女は悲しみを隠して笑顔で送り出した。すると女の手を握った男は女に別の男が居るのではないかと疑い、或る日河内へ行くふりをして家に戻り、植え込みの陰で見ていると、女が綺麗に化粧をして現れ、遠くを見て歌を詠んだ。

風吹けば 沖つ白波たつた山 夜半にゃ君が ひとりこゆらむ

男は、自分を思ってくれる女のいじらしさに恥ずかしくなり、すっかり河内から足が遠のいてしまった。河内の女は、男が通ってこないの、歌を作り届けさせた。

君の住む あたりと思う生駒山 雲よかくすな雨はふるとも

さすがに男は気が引けて、「そのうちに行こう」と返事をした。女は喜んで待っていたが、いっこうに男はやってこない。女はまた歌を送った。

待ちぼうけ 頼る心はなくなれど 来うる心はいよいよ深く

しかし、一度冷えた男の気持ちは元に戻らず、二度と河内へ通うことはなかった。

伊勢 昔、男がいた。男は伊勢の国に、狩の使いとして出向いた時、その時の斎宮と出会った。斎宮は都の貴公子のその男を、心を込めてもてなした。

男のほうも若く清らかな斎宮に心引かれ、二日目の夜、「今夜お逢できないですか」と斎宮の耳元で囁いた。斎宮は自分の身分上それは許されないと考えたが、気持ちを抑えることが出来ず、人が寝静まるを待って、男のもとにやってきた。

男は喜んで自分の寝所に引き入れたが、暫くして女は帰ってしまった。男はあまりにも短い逢瀬にがっかりした。すると夜明けに、女から一つの歌が届けられた。

君やこし 我や行きけむ おもほえず 夢かうつつか寝てか醒めてか

男は夢のような女の歌に切なくなり、今夜もう一度逢わむと返歌を送った。

かきくらす 心の闇にまどひにき 夢うつつとは こよひ定めよ

その日男は狩に出てもうわの空で、少しでも早く二人で逢いたいと思って過ごしたが、その夜は伊勢の国守の酒宴に招かれ、とうとう一晩中もてなされてしまった。夜が明ければ尾張の国へ出発する予定になっていたから、もう二人きりで逢うことは出来ない。すると夜が明ける頃女の方から盃の皿に、歌を書いてさし出した。

かち人の渡れど濡れぬ 江にしあれば

歌には下の句がない。そこで男はその盃の皿に、松明の炭で下の句を書き足した。

また あふさかの関は越えなむ

徒歩で渡っても濡れない江のように、二人の縁は浅かったのですという女の歌に、そんなに、浅い江ならばきっとまた私は逢坂の関を越えてまたやって来ましよう、男が答えたのである。この斎宮とは文徳天皇の御娘、惟喬の親王の御妹である。

梓弓 昔、片田舎に男が居た。男は都で出世をしたいと思ひ宮中に仕えることにした。男には妻が居たが、別れを惜しんで行ったまま三年経っても帰って来なかった。女は待ちくたびれて、熱心に言い寄る別の男を迎え入れる決心をした。

その日、女が別の男を待っていると、ちょうどその夜に元の男が帰ってきた。けれども、女は「戸をあけたまへ」と言い募る男に会おうとせず、戸を開けなかった。そして歌を詠んで、戸の隙間から外の男に差し出した。

あらたまの年の三年を待ちわびて たゞ今宵こそ新枕すれ

男は全てを悟って、新しい夫と幸せになって欲しいと思い、女に歌を送った。

梓弓ま弓つき弓年を経て 我がせしがごと うるはしみよせ

女は、男の歌を見て、本当は男を思っている自分の心に気付かされた。

梓弓引けど引かねど昔より 心は君に寄りにしものを

しかし、男は女の歌に答えず帰ってしまった。女は悲しくなって、夢中で男の後を追いかけて行ったが追いつくことができず、清水の湧く所で倒れてしまった。そしてそこにあった岩に指の血で歌を書き付けて、息絶えてしまった。

あひ思はで 離れぬる人をとゞめかね わが身は今ぞ消え果てぬめる

それほどまでに女は男を愛していたことに気付いたのである。そして愛する人を待つことが出来なくなった時、女は死ぬしかなかったのである。

野焼き 昔、男がいた。男は都から東国に行き土地の娘と仲良くなった。男は甘い言葉で娘を誘い出し、武蔵野へ行く途中に国の守に追われて、娘を草むらの中に置いて逃げてしまった。娘の親が「娘を盗まれた」と国の守に訴えたのである。

娘は何も知らずに一人で草むらの中に潜んでいると、「盗っ人はこの野原だ」という人々の声が聞こえ、追い立てるために野原に火をつけようとしていることがわかった。女は困って歌を詠んで嘆願した。

武蔵野は 今日ばな焼きそ若草の 夫(つま)もこもれり我もこもれり

武蔵野を今日だけは焼かないで下さい。若草の中には、愛しい夫と私が一緒に隠れているのですから。だが、男は都に逃げ帰り、娘は親の元に連れ戻された。

春秋 昔、男がいた。どのような事情か、その男は足繁く通っていた女のもとを訪れなくなった。女のほうにはその後、別の男が通ってくるようになったが、元の男との間には子供があり、男からは時々手紙がきた。

女は絵が上手かった。ある時男から女のところに、絵を描いてもらいたいと使いがきた。女は、丁度今、別の男が来ているからと言って頼まれた絵を一日二日と先延ばしにしていた。すると、暫くして男から一首の歌が送られてきた。

秋の夜は 春日わするものなれや 霞に霧や千重まさむらむ

季節は秋であった。男は自分を春に例えて、やっぱり今は秋の霧の季節、春の霞は忘れられてしまったのですね、と恨み事を言ったのである。すると、女は、

千ぢの秋 ひとつの春にむかはめや 紅葉も花もともにこそ散れ

千の秋も一つの春にかなわない。ええ、貴方のほうが好きでしたよ。でも、どんなに春や秋が美しくても、いつか季節は移っていくものなのです。

(おわり)

6月10日 京の小路散歩

「……当時、私は同志社女子大の右上にある伏見宮墓地の近くに下宿していました。幸神社から西へ徒歩4、5分の処です。……上禅寺から天寧寺へ行く途中に通られる、寺町鞍馬口の角にある鞍馬湯という銭湯にも時々行っていました」



(今は昔、今出川通りを走る市電)

小島さんが朝礼の時に紹介した伊丹の奥澤さんのメールの一部。奥澤さんは同志社で、半世紀程前の昭和30年代半ばに青春の4年間をここで過ごしたそうです。ちなみにメールにある鞍馬湯は今も元気で、年中無休です。

半世紀前、日本は大きく変わろうとしていました。新幹線が開通し、東京五輪が開催されたのは半世紀前の1964年、それは王貞治がホームランを打ち出した時で、吉永小百合が十代のスターだった時で、コカコーラの自販機が街に溢れ出した時で、堀江青年が太平洋を横断した時で、僕が高校生活を送っていた時なのです。

半世紀前、京都も大きく変わろうとしていました。東寺の塔(55m)より遥かに高い京都タワー(130m)が完成するのは半世紀前の1964年。それから、まるで平安京の大路を縫うように走る市電が地下鉄に変わり、何かいいことに出会いそうな気分させる京阪特急が地下に潜り、そしてチベットのポタラ宮のような京都駅ビルが完成したのは30年後の1994年、それは平安遷都千二百年の年でした。

半世紀前、それはポコアのほぼ全員が青春時代を送った時代。150年前の幕末が歴史の時間なら、まだ京都タワーも駅ビルもない半世紀前は立派な歴史かもしれない。幸いなことに京都の小路の隅々にはその頃の歴史が豊富に残っているし、何より青春の頃の遠い記憶には、その頃の京都の風景が残っている。だから、来年も再来年も歩きに行きましょ、半世紀前の青春の歴史が眠る京都の小路を。

朝礼の時の御霊神社で、巨大な鉾のようなものを取り囲んでいる人々が居ましたが、あれは5月18日の御霊祭で先導を務めた剣鉾です。剣鉾は悪霊を鎮める祭具で、古代の銅剣、銅鉾が平安時代の御霊信仰と結びついたもの、京都に177本も残っているそうです。で、あの人たちはあの剣鉾で韓国の歴史ドラマを撮影していた訳ではなく、祭りの時を狙って剣鉾の調査をしていたんだそうです。



林さんの「幾松」の記事、京都の粋があって面白かったですね。写真はその幾松の写真ですが、ちょうど出てきたこの外人の彼女も吊天井を見ただけでしょうか。この後、カメラを向けると快く笑顔を見せてくれました。

快晴の6月の例会、この日の参加者は58人、冊子(6月例会の)の頁数は68頁でこれも新記録じゃないですか。